

平成24年 沖縄平和祈願慰霊大行進に参加して

下田市遺族会 笹本睦子

昭和20年5月26日。私の父が沖縄で戦死した日です。毎年6月23日の沖縄慰霊の日をテレビで見ている、私はどうしてもこの日に沖縄に行きたいと思いつけて来ました。義母を一昨年、6年間の介護の末96歳で亡くしました。天寿を全うしおくり出すことが出来、時間にも余裕が出来ました。

そんな時、下田の遺族会会長の長谷川さん、副会長の村田さんのご尽力で、沖縄本土復帰40周年という節目の年に、日本遺族会静岡県の代表として、第51回沖縄平和祈願慰霊大行進に私達夫婦と娘2人、他に5名の計9名が行くことになったのです。

当日は、全国から参加した人達総勢約1,000人で、糸満市摩文仁^{まぶに}の平和記念公園まで9kmの行進に、夫の体調が悪く私達は途中からの行進になりましたが参加できました。公園内の沖縄全戦没者追悼式会場に到着すると、追悼式参加者5,500人から盛大な拍手で迎えられ入場しました。正午の時報に合わせ式典は始まり、一分間の黙祷の後、照屋会長が追悼の言葉を述べ、野田総理に対し早急に靖国神社に参拝し、慰霊と世界の恒久平和を祈願する様強く要望しました。その後、各代表による献花、仲井真沖縄県知事の平和宣言、沖縄県立首里高校三年生の金成さんの平和の詩「礎に思いを重ねて」の朗読があり、野田総理が挨拶し追悼式は終了しました。

その後私達は、平和記念公園内にある静岡の塔と国立戦没者墓苑に献花をしてから、戦没者の名を刻んだ「平和の礎（いしじ）」に行き、父の名前「笹本誠」を見つけ、お参りをしました。ようやく父に会えたという思いで胸が一杯になりました。「お父さん。お母さんは今も元気で仕事がんばっているよ。もっともっと長生き出来るよう見守ってね。」と語りかけました。あのハイハイしていた睦子がこんな白髪のおばあちゃんになってびっくりしただろうな。父の名前をさすりながら、いろいろ語りかけました。

かつて、母は戦地の父から送られてきた数枚の葉書を私に見せてくれました。表には「軍事郵便」と赤い判が押され、裏には父の細かい字がぎっしりと書かれていました。そして、母は私にこう言いました。「私が死んだら、この葉書はお前が持っていないさい。お前のことしか書いていないから。」と。

ぎっしりと書かれた文字の中で、私には「睦子」という字しか読めませんでした。丁度その時、父の従妹にあたる坂田のおばちゃん（坂田てい先生）が義母に線香をあげにきてくれました。おばちゃんにその葉書を見せると「私が解

読してくるよ。」と言ってくれ、丁寧に一冊のノートに書いてくれました。

それは、母からの手紙への返事の様でした。幼い私を連れて、身重で満州より帰国した母への思い、「睦子が見違える程大きくなった事を想像している。」とか、「満州の気候で育った睦子の身体に十分気を付けるように。」とか、所々に「睦子」という文字が入っており、母の言う「お前の事しか書いていない。」という言葉の意味が分かりました。

父は弟「兼治」の顔を見ていない、私しか…。父の顔を私も知らない、でも父は私を見ている。父の顔も知らない弟と、自分の息子にも会っていない父、どんなに無念であっただろうか…。

夢も希望も未来も何もかも戦争に奪われてしまった父。戦後70年、あの大战が風化しつつある中、私たち遺族は子や孫、曾孫まで尊い生命を祖国のために捧げた父達のことを伝え続けていかねばならないと思います。日本が戦後幾多の困難を乗り越え、平和で豊かな生活が出来るのは、多くの犠牲者のお陰だということは忘れないでほしいのです。

式典の終わった後の平和の礎には多くの人がお参りをしており、亡き人の名を何度も指でなぞる人、子や孫を連れて飲み物や花を手向ける人でいっぱいでした。

平和の礎を後にした私達は、糸満市米須の「魂魄（こんぱく）の塔」に行きました。戦後、沖縄の方々が散乱している遺骨を拾い上げつくられた最大の慰霊塔です。ここでも大勢の人達が花を手向け、香をたいていました。

毎月お参りしている父の墓に遺骨はありません。母は沖縄の石を入れてあると言います。摩文仁の丘から眺めた沖縄の海は、言葉に表せないほどきれいな海でした。このきれいな海が真っ黒になったと言います。米軍の軍艦で…。

私は、沖縄に行き、戦没者追悼式に参加したことによって、長年の胸のつかえがとれた様な気がしました。同行してくれた病弱な夫にとっては大変な旅だったと思いますが「来てよかった。」と言ってくれました。そして、私達が沖縄に行き、父に会ってきたことを一番喜んでくれたのは母でした。いつも心配ばかりかけていますが、少しは親孝行ができたかな、と思っています。

お父さん、いつも私たちを見守ってくれて有り難う。

今日も世界のどこかでテロや戦争が行われています。地震や津波などの天災はどうにもならないかもしれません。でも、戦争は人間の力でどうにもなるも

のです。

子供や孫の時代が戦争の無い平和な世の中であることを、心から祈っています。